

02 歴史展示の具体的内容
歴史ストーリー

テーマストーリー
＜仏教の伝来と興隆＞

語り部 道昭

<仏教の伝来と興隆> 概要

八百万の神を信仰していた日本に伝来した仏教は、蘇我氏と物部氏による崇仏論争を経て、蘇我馬子や聖徳太子によって興隆されます。豪族達を中心に広まっていった仏教は、天皇がその興隆の中心となり、やがて国家仏教となってゆきます。100年以上の歳月をかけて仏教が日本に根付いていった道のりを紹介します。

【1】カミの崇拝

仏教が伝わる以前の日本は、「八百万の神」を崇拝する多神教の世界でした。各豪族はそれぞれのカミをまつり、豊作や領有民の安穏をカミに祈りました。豪族たちを支配する大王は司祭者的性格をもち、宗教的権威を背景に政治を行いました。



【2】東アジアと仏教

インドで生まれた仏教は、紀元前1世紀末に中国に伝わり、やがて中国全土に広まりました。4、5世紀には朝鮮半島にも伝わり、東アジア共通の宗教となり、最先端の文化となりました。そんな状況の中、6世紀前半に百済の聖明王が日本に仏教を伝えました。



【3】崇仏論争

仏教の受容をめぐるのは、積極的な受容を主張する蘇我氏と、日本古来の神を敬い受容に反対する物部氏が対立しました。そこには政治的な権力争いも絡んでおり、対立は内戦に発展し、蘇我馬子が物部守屋を討って政治の主導権を握ります。これにより、明日香を中心に寺院の建立がさかんとなり、朝鮮半島から僧侶や建築に係わる各種技術者が渡来してきました。



【4】仏教興隆策

蘇我馬子による飛鳥寺の建立をはじめとして、豪族たちの間に寺を建てるのが流行し、明日香の地には数々の寺院が建てられました。聖徳太子は官人の心得として仏教信仰を奨励するとともに、仏教經典の研究成果として「三経義疏」を編纂するなど、仏教興隆に努めました。これにより豪族の間に仏教信仰がしだいに広まっていきました。



【5】天皇集権と仏教

舒明天皇の百済大寺の建立によって仏教興隆の主導権を天皇が握ることとなり、中央集権への機運が高まります。それと時を同じくして、権力の象徴であった大規模な古墳造営は姿を消していきます。火葬の習慣が広まったことや、646年の薄葬令によって古墳の造営が制限されたことも一因とされています。



【6】国家仏教への動き

天武天皇は、伊勢神宮を皇室の祖先神として「八百万の神」の最上位に位置づけて、神道の国家統一を図るとともに、仏教についても大官大寺や薬師寺など官立の寺院を建立して、豪族たちの私寺の上位に位置づけ、仏教の国家統一を図ります。僧尼の統制も含めて、官立寺院を中心に体系化することで氏族仏教から国家仏教への転換が図られていきました。

語り部：道昭(どうしょう)

(629～700)

略歴

7世紀の僧侶。河内国丹比(たじひ)郡の生まれ。俗姓は船連(ふねのむらじ)で、船氏は百済系の渡来人と伝えられている。

653年に学問僧として遣唐使にしたがって唐に渡り、長安の大慈恩寺で玄奘に師事し、広く仏教の教学を学んだ。661年の帰国に際して、玄奘から仏舎利と多くの経論を授けられ、帰国後は、飛鳥寺の東南隅に禅院を建てて禅を広め、諸々の経典を説いたという。

晩年の10年余りは、広く各地を行脚し、井戸を掘ったり、橋を架けたりするなどの社会事業を興したとされ、この実践は弟子の行基に受け継がれた。仏教の教えを、社会事業という形で表した最初の人物と言える。

700年に亡くなり、遺言によって明日香村の栗原の地で火葬に付された。これが我が国における火葬の始まりと言われている。

中心人物／周辺人物

聖明王

仏教を篤く保護した6世紀前半の百済の王。日本との交流も深く、欽明天皇に使者を送り、仏像と経典を伝えた。

欽明天皇

仏教が伝来した際、仏教信仰の是非を豪族達に問うた天皇。豪族達は崇仏派と排仏派とに分かれて対立した。

物部尾輿

仏教公伝時の大連。外国の神を礼拝すれば国神の怒りをかうであろうと主張した、排仏派の中心人物。

蘇我稲目

仏教公伝時の大臣。東アジア諸国で信仰されている仏教を、日本も取り入れることを主張した、崇仏派の中心人物。

蘇我馬子

稲目の子。渡来系の司馬氏と協力して崇仏運動を推進。物部守屋を倒して実権を握ると、日本で最初の本格寺院、飛鳥寺を建立。

聖徳太子

蘇我馬子と物部守屋の戦いの際に馬子側に参戦。推古天皇の摂政として仏教興隆を推進し、法隆寺を建立した。

玄奘

仏教の原典を求めてインドに赴き、持ち帰った膨大な経典を訳した唐代の僧。遣唐使の一員として入唐した道昭が、その教えを受けた。

天武天皇

地方の国々に金光明経などの護国の経典を配り、僧尼の統制を厳しくするなど、国家仏教への歩みを進めていった。

<仏教の伝来と興隆> ストーリー詳細

道昭の語りによる「テーマ：仏教の伝来と興隆」についての解説

〔道昭〕

私は道昭という者です。仏教を学ぶために唐に渡り、かの玄奘三蔵から直に教えを請うた者です。

これから皆さんに、仏教が日本に伝わってから飛鳥時代にかけての仏教興隆の道のりをお話していくことにしましょう。当時の日本に仏教が根付くまでには、本当に様々な紆余曲折がありました。

第1章 カミの崇拝

仏教が伝わる前の日本

〔道昭〕

仏教が伝わる前の日本では、農耕生活の安定のため自然神を崇拝する信仰が発達していました。そのためこの国を治めるためには、邪馬台国の女王・卑弥呼のように神と対話のできる司祭者的性格が求められました。4世紀に日本を統一したヤマト政権の大王たちも、司祭者として神を祭ることが最も重要な仕事で、その宗教的権威によって政治を行い、それぞれの領地をもつ豪族達をまとめていました。

国の豊穡と安寧を祈っていた大王 ― 欽明天皇の語り―

〔欽明天皇〕

瑞穂の国と呼ばれる日本では、稲作はとても大切なものじゃった。われらが信仰する神は、豊かな稔りをもたらし、日本全域に力を及ぼす神じゃ。国を治めるわれら大王家にとって、その神を祭ることが一番の仕事なのじゃ。聖なる宮を祭祀の場とし、みなのために祈りをさげることによって権威を保ち、国をまとめてきたのじゃ。わが大王家の力の偉大さは、巨大な古墳にあわられておるじゃろう。



欽明天皇陵

それぞれの神をまつる豪族

〔道昭〕

大王にしたがう豪族達も、それぞれの領地にそれぞれの神をまつり、支配下にある領地と領民をおさめていました。

日本には「八百万の神」と呼ばれるほど多くの神が存在し、各地で異なる神が信仰されていましたが、その頂点に立つ司祭者である大王の権威によって、国に安定がもたらされていました。

飛鳥坐神社



飛鳥神奈備と呼ばれ、日本書紀の天武紀にも記録が見られる明日香の鎮守社。

第2章 東アジアと仏教

仏教の伝播

〔道昭〕

さて仏教はどのようにして日本に入ってきたのでしょうか。

仏教は紀元前5世紀頃インドで生まれ、中央アジアを経て、紀元前1世紀末に中国に伝わりました。多くの人を惹きつける普遍性をもち、他の宗教を否定しない仏教はその後中国全土に広まりました。また、3世紀頃にガンダーラ地方で生まれた仏像は、4世紀には中国でも作られるようになり、経典が漢訳されると4世紀後半には朝鮮半島に仏教が広がりました。

東アジア共通の宗教であり、文化だった仏教

〔道昭〕

東アジアの多くの国では、まず国家元首が仏教に帰依し、国をあげて仏教を興隆させ、欽明天皇の頃には、仏教は東アジア共通の宗教となっていました。

また、仏教の隆盛は、漢字や建築技術などの先進文化を周辺諸国に伝え、中国や朝鮮半島ではさかんに交流が行われていました。そんな状況の中で百済の聖明王は、欽明天皇のもとに経典と仏像を送り、仏教を伝えました。

6世紀半ばの「仏教公伝」と呼ばれる出来事です。

仏教を日本に伝えた理由 ―聖明王の思い―

〔聖明王〕

仏教はあらゆる教えの中でも最も優れた教えです。その教えは真の悟りを導くもので、求め願うことを心のままにかなえてくれます。今や仏教は、はるかインドから中国、朝鮮半島にまで広まっています。仏法を広めよとおっしゃった釈迦の御心に従うことは、私の責務でもあるのです。是非日本でもこの素晴らしい仏の教えを広めていただきたいと思います、仏教をお伝えすることにしました。

仏教公伝後の欽明天皇の苦悩

〔道昭〕

百済から日本へと伝えられた仏教でしたが、そのことによって欽明天皇は、重大な事態に直面することになりました。

日本古来の神を祭る司祭者として、歴代の天皇の伝統を受け継ぐ欽明天皇が、もし仏教を受容すれば、それは他の国の神を信仰することを意味します。国内が混乱に陥ることは、十分に予測されました。

また、百済の聖明王から正式に伝えられた仏教をどのように扱うかは、外交上の問題でもありました。百済の聖明王は日本と同盟を組みたいと考えていたようなのです。

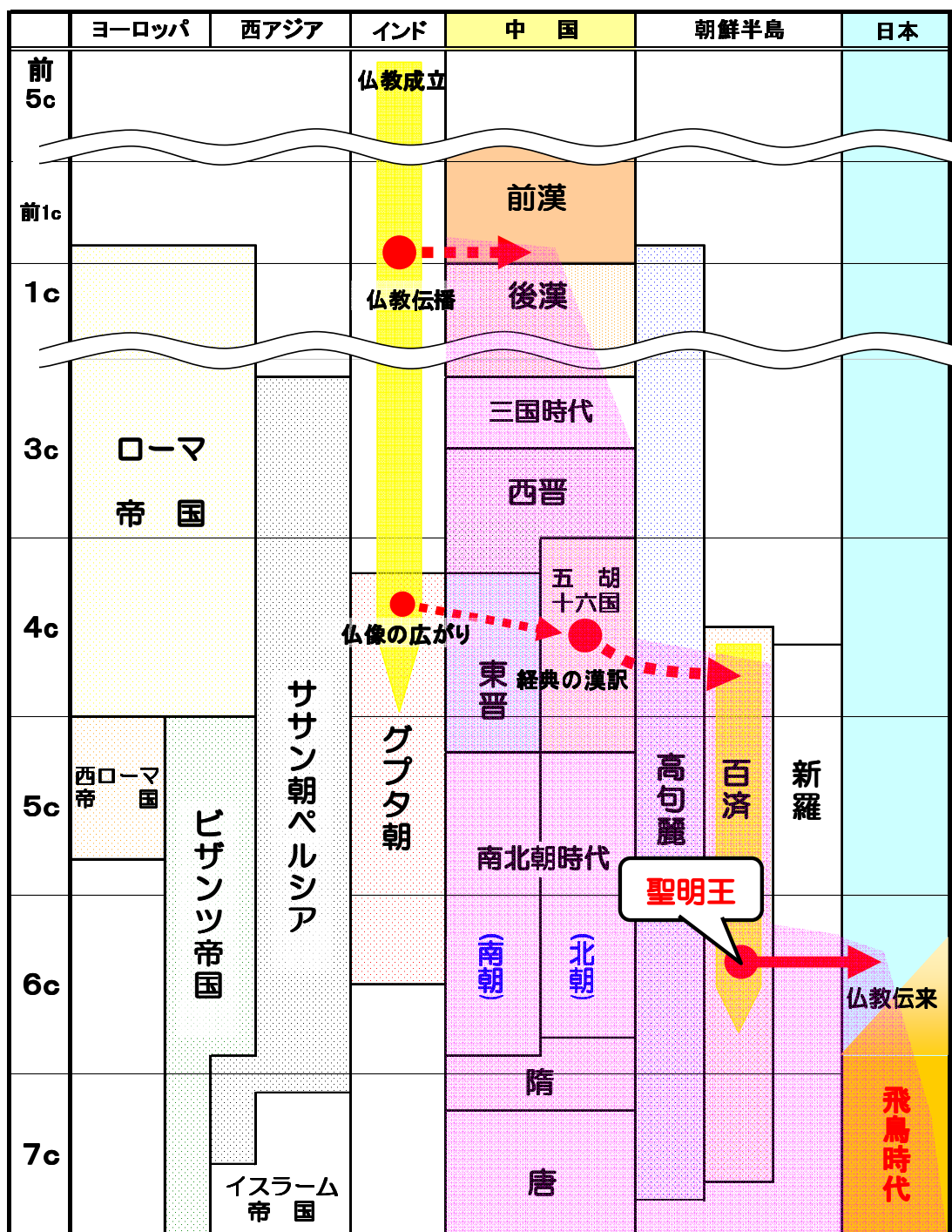
（～続き） 第2章 東アジアと仏教

群臣に仏教受容の可否を問う

[道昭]

そこで欽明天皇は、仏教を受容するべきか否かを、臣下の蘇我氏と物部氏に問うことにしました。天皇自身は中立の立場をとったのです。欽明天皇にすれば苦渋の決断でした。

※参考 仏教の伝来ルート



※赤色の影付部分は、仏教の広がりのイメージ

第3章 崇仏論争

仏教受容をめぐる物部氏と蘇我氏の論争

〔道昭〕

欽明天皇から、仏教の受容について尋ねられた豪族達の意見は真つ二つに分かれます。蘇我氏は積極的に仏教を受け入れようとしますが、古くからの神々を敬う物部氏は強く反対しました。臣の姓をもつ蘇我氏は天皇に対して自由にものが言える立場にあり、連の姓をもつ物部氏は長年天皇家に仕えてきた家柄です。両者は仏教の受容をめぐり対立しますが、そこには政治的な権力争いもからんでいたと思われます。

日本古来の伝統を尊ぶ物部氏 ―物部尾輿の思い―

〔物部尾輿〕

大王は日本古来の神を祭ること、われらの世を治めてこられたのじゃ。それが大王家の伝統である。外国の神を祭ることなど到底考えられぬことじゃ。それに加え各地の氏族たちもそれぞれの土地でそれぞれの神を祭っておるではないか。大混乱が起こるのは目に見えておる。大王様、もし他国神を礼拝すれば国神の怒りを招くことになるでしょう。

渡来文化の導入に積極的な蘇我氏 ―蘇我稲目の思い―

〔蘇我稲目〕

仏教が如何にすばらしいものであるかは、渡来人達からも聞きおよんでおります。中国でも朝鮮諸国でも、すべて仏を礼拝して国をまとめ、繁栄を築いているのですぞ。遅れをとってはなりませぬ。他国で尊ばれている仏を、我が国においても尊ぶべきです。

仏教をめぐり対立する物部氏と蘇我氏

〔道昭〕

欽明天皇は、国をあげて仏教を受容する選択はせず、聖明王から送られてきた仏像を稲目に授けて、私的に礼拝することを許可しました。

稲目は仏像を自宅に安置しますが、蘇我・物部両者の対立は治まりません。疫病によって多数の死者が出ると、「蘇我氏が他国神を礼拝するので、国神が祟った結果である」と物部氏は主張し、稲目が授かった仏像を難波の堀江に投げ捨て、堂を焼いてしまいます。何と恐れ多いことをしたものです。

実は物部氏には、政治の主導権を新興豪族の蘇我氏に奪われてはなるものかという思いがあったのです。

(～続き) 第3章 崇仏論争

仏教の信仰を続ける蘇我氏

[道昭]

一方の蘇我氏も負けてはいません。蘇我稲目の子・馬子は再び堂を建てて仏像をまつり、そこには百済から僧や経典が送られてきました。また渡来系氏族の中から3人を選んで尼として出家させ、従来の巫女と同じように仏教の神を祀る事にしました。しかしその行為は逆に物部氏の怒りを買うことになります。

[蘇我馬子]

私は仏教興隆に努めており、司馬達等の娘・嶋ら三人を出家させました。嶋は高句麗からの渡来僧・恵便のもとで善信尼として修行し、百済留学からの帰国後に住んだのが桜井寺(のちの豊浦寺)だったのです。また嶋の兄で、飛鳥寺の仏像を作った鞍作止利の父でもある多須奈は、坂田寺の建立に関わったのです。

豊浦寺跡(向原寺)



論争は戦いとなり、蘇我氏が物部氏を滅ぼす

[道昭]

対立は子供達の代になっても一向に治まらず、587年、蘇我馬子と物部尾輿の子・守屋はついに兵を集めて激突。戦いは蘇我氏の勝利に終り、物部氏は滅亡、半世紀にわたる仏教受容をめぐる争いによりやく終止符が打たれました。このことにより、日本における仏教興隆の道が大きく開かれ、仏教は氏族が祭る古来の神々と、同格の地位を得ることになってゆきます。

第4章 仏教興隆策

仏教興隆に努めた蘇我馬子

〔道昭〕

政治の主導権を握った蘇我馬子は、聖徳太子とともに仏教興隆策を進めていきました。588年、馬子は飛鳥寺の造営にとりかかります。百済から多くの技術者が渡来し、寺の建立にあたりました。飛鳥寺は塔を中心に3つの金堂を持つ大きなお寺でした。606年には、鞍作止利によって黄金色に輝く丈六の仏像（飛鳥大仏）も造られました。

飛鳥寺



日本最初の本格的寺院と三宝興隆の詔 —蘇我馬子の思い—

〔蘇我馬子〕

目にもまばゆい絢爛たる伽藍が並び建った時の感激は、言葉にすることもできないほどだった。日本最初の本格的な仏教寺院の完成によって、ますます仏教は広まってゆくじゃろう。そうそう、この寺院が完成に近づいた594年には、推古天皇により「三宝興隆の詔」が下ったのじゃ。仏教を興隆せよという天皇じきじきの命令によって、仏教が全面的に許可されたわけだ。仏教伝来から半世紀、父稲目の代からの念願がかない、誠にうれしい限りじゃ。

推古朝における仏教興隆策の背景

〔道昭〕

595年には高句麗僧の慧慈、百済僧の慧聡が来日して飛鳥寺に入り、602年には百済僧の観勒、610年には高句麗僧の曇徴らも仏の教えとともに進んだ知識や技術を伝えます。

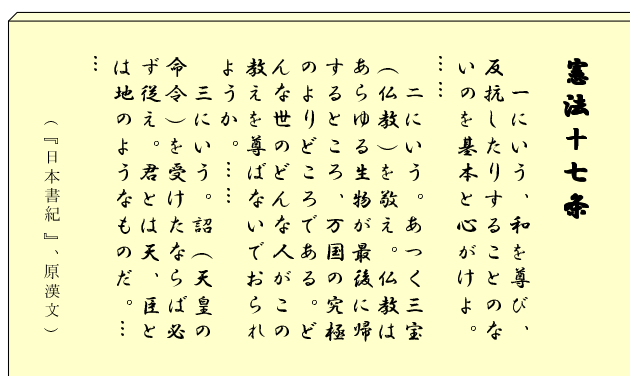
推古天皇の時代に仏教興隆策がとられた背景には、中国や朝鮮半島で篤く信仰されている仏教を日本も取り入れるべきだという判断に加え、それぞれの神を信仰している豪族達を、仏のもとに一つにしたいというねらいがありました。

(～続き) 第4章 仏教興隆策

仏教の尊い教えで国をまとめる ―聖徳太子の思い―

〔聖徳太子〕

仏教の教えはすばらしい。私は、高句麗僧の慧慈らから多くのことを学び取った。その中で私の心に強く残ったのは「諸悪莫作、諸善奉行」、”悪をなすことなく、善いことを行おう”ということだ。この尊い教えは国の礎を築くことにも役立った。私が作った憲法十七条にもその精神を散りばめたつもりだ。豪族たちが自分勝手なことを言わず、心を一つにまとめてくれれば、きっと中国に肩を並べる立派な国ができることだろう。



聖徳太子による仏教興隆

〔道昭〕

聖徳太子は女性が救われることを説いた勝鬘經、世俗の男性が救われることを説いた維摩經、あらゆる衆生が救われることを説いた法華經の3つの經典を特に重んじ、その注釈書である「三經義疏」をまとめました。また天皇や豪族達に經典を講義しました。

仏教のひろがり

〔道昭〕

蘇我馬子と聖徳太子の行いにより、仏教は豪族達の上に広がっていきました。渡来系の氏族達の間で寺院の建設も進み、624年頃には大和を中心に46の寺院が建立されていました。

第5章 天皇集権と仏教

東アジアの最先端の情報を持ち帰った留学僧・旻

〔道昭〕

舒明天皇が即位してまもない632年、僧旻らが新羅使に送られ帰国します。僧旻は608年に遣隋使として隋に渡り、隋が唐に代わった後も留まって、20年以上の歳月をかけて学問を修めました。

僧旻をはじめとする学問僧は、最先端の情報を日本にもたらしました。舒明天皇は、留学僧から先進国である唐の皇帝や新羅の国王の仏教受容の実態を知ります。唐の都長安や新羅の都では、大伽藍を持つ寺院で仏教行事が盛んに行われ、皇帝や国王が先頭に立って仏教の興隆に力を注いでいました。

天皇家の寺・百済大寺の造営

〔道昭〕

舒明天皇は639年、天皇家の寺を建てることを決意、百済大寺の造営に取りかかり、最新の知識をもつ僧旻を百済大寺の初代寺主とします。

百済大寺跡(吉備池廃寺)
＜桜井市吉備＞



舒明天皇と仏教 ― 斉明天皇の思い ―

〔斉明天皇〕

私の夫である舒明天皇が建てた百済大寺には、飛鳥寺をはるかにしのぐ九重塔が聳えていました。舒明天皇は、仏教の興隆において主導権を握ってきた蘇我氏よりも、大きな寺を造りたいと願いました。そして天皇家の我々が仏教に帰依する以上、仏教興隆のリーダーは蘇我氏ではなく天皇家が一番ふさわしいと舒明天皇は考えたのです。

天皇家主導の仏教興隆

〔道昭〕

仏教公伝からおおよそ1世紀一。日本はついに天皇自らが寺院を建立して、仏教を受容する姿勢をはっきりと示しました。それとともに天皇家が主導して国づくりを行う機運が盛り上がり、645年には大化改新が起こります。

(～続き) 第5章 天皇集権と仏教

古墳の衰退

[道昭]

また天皇家が仏教興隆の主導権を握るのと時を同じくして、これまで権力の象徴としてつくられてきた大規模な古墳が、姿を消してゆきました。壮麗な伽藍をもつ寺院が、新しい権力の象徴になったとも考えられます。

646年には公地公民化政策の一環として薄葬令が出され、身分に応じて古墳の規模などが規制されました。こうして8世紀の初めには古墳の築造は終末を迎えます。

火葬の習慣

[道昭]

私は653年に唐に渡り、玄奘三蔵に学んだのち661年に帰国しました。仏教には「輪廻転生」(魂は何度も生まれかわる)の思想があり、遺体に重きを置かないことから火葬が一般的です。私は仏教の教えとともに、この火葬の習慣も日本に伝え、次第に広まっていきました。余談ですが、日本で最初に火葬されたのは、何を隠そうこの私なのですぞ。

呉原(栗原)寺跡



僧の道昭が火葬された地と伝えられている。

第6章 国家仏教への動き

皇室の祖先神と「八百万の神」

[道昭]

天智天皇の没後の672年に起こった壬申の乱を制し、飛鳥浄御原宮で即位した天武天皇は、伊勢神宮を皇室の祖先神として、日本古来の「八百万の神」の最上位に位置づけます。

国家の寺・大官大寺の造営

[道昭]

同時に舒明天皇が天皇家の寺として建てた百済大寺を受け継いで、大官大寺を建立し、国の寺として豪族達の氏寺の上位に置き、仏教の国家統一を図ります。それは、氏族がそれぞれに仏教を信仰する形を改め、国家仏教への転換を促そうとするものでした。

大官大寺跡



仏教の加護によって国を治める 一天武天皇の思い

[天武天皇]

天照大神を皇室の祖先としてもつ私は、神の子として、祖先の創り賜うたこの国をしっかりと治めなくてはなるまい。金光明経というお経にも、国王は神の子であり、仏に守られて国を治めると書かれている。私はこの有難い教えを全国に広めて、仏の加護のもとでこの国に安寧をもたらしたいと思う。国を治める私も、仏に救済を求める衆生のひとりである。仏の教えに基づいて国を治めるならば、国土は安らぎ豊かになり、人々は楽しく幸せに暮らせるだろう。

寺院の建立とともに全国に広がる仏教

[道昭]

天武天皇は全国各地の氏族に寺の建立を命じ、僧侶や技術者を中央から派遣して仏教の興隆に努めました。

7世紀の後半になると飛鳥寺、大官大寺、川原寺、薬師寺の飛鳥四大寺を始め、多くの寺が飛鳥に建立され、680年には24の寺が、当時の先進技術を誇るように、飛鳥の地に立ち並んでいました。

大官大寺を頂点に日本全土に寺院の鐘の音が響き、仏の尊い教えが行き渡っている光景を、天武天皇は思い描いていたのでしょう。

持統天皇の時代には全国に500以上の寺が建立され、日本全国に仏教の教えが広まってきました。仏教公伝からおよそ150年の歳月を経て、神と仏が仲良く共存し、日本全国が仏教の教えによってつながることになりました。

川原寺(弘福寺)



仏教興隆にかけた志は奈良時代へと続く

[道昭]

仏教が日本に根付くためには、本当に長い年月が必要でしたが、その苦勞の甲斐あって仏教興隆にかけた飛鳥時代の人々の志は奈良時代へと受け継がれてゆきました。

天武天皇の曾孫にあたる聖武天皇は仏教を篤く信奉し、全国に国分寺・国分尼寺を建て仏教による国の安定を図りました。

唐から戻った後に各地を行脚して、人々のために井戸を掘ったり橋を架けたりした私の行いもまた、奈良時代に大仏造立に尽力した、弟子の行基に受け継がれたのです。

<仏教の伝来と興隆> 映像構成案

■映像展開について

仏教が日本に根付いた飛鳥時代に、留学僧として唐に学んだ道昭が語り部として、「仏教の伝来と興隆」について紹介してくれます。道昭は、西遊記でも有名な玄奘三蔵に直接教を請うた人物です。

その道昭が、大官大寺をはじめとした豪壮な伽藍が建ちならぶ飛鳥京の地に立ち、仏教伝来から仏教が興隆する歴史に思いを馳せます。それに合わせて走馬灯のように映像が展開し、仏教興隆に関わった歴史上の主要人物も登場してそれぞれの思いを語り、飛鳥時代の日本に仏教が広まってゆくプロセスを紹介します。

プロローグ(玄奘三蔵の弟子、道昭)

道昭が飛鳥浄御原宮の時代の飛鳥京に立っている。感慨深げなつぶやきから物語がはじまる。

「仏教の教えは、明日香の地で日本の国を支える役割を果たしている。ここにいたるまでは長い道のりであった。私の師・玄奘三蔵が真の教を求めた天竺への旅もそうであるように、仏教がこの国へ伝わるまでも……実に長い道のりであった」

道昭の回想がはじまり、まず最初に玄奘三蔵が紹介される。7世紀、想像を絶するような旅をして仏教発祥の地・インドに赴き、仏教の原典を中国に持ち帰った玄奘について語り、インドで生まれた仏教が東アジアへと伝播したことの紹介へと移ってゆく。

第1章 東アジアと仏教

道昭の回想の中にアジアの地図が現れ、仏教がどのように生まれ、伝わっていったかが語られる。

紀元前5世紀頃インドで生まれた仏教は、前1世紀末に中国に、4世紀頃には朝鮮半島にも伝わった。

東アジアでは仏教は国から国へ、国家元首から国家元首へと伝えられており、国家元首が仏教に帰依し、国づくりの一環として仏教を興隆させていた。また仏教は漢字や建築技術など最先端の文化を伴っており、中国や朝鮮半島では進んだ交流が行われていた。そんな状況の中、日本にも6世紀の半ばになって百済の聖明王から欽明天皇にあてて、仏像と経典が贈られてきた。

「仏教は素晴らしい教えであり、日本に伝えることは、仏法を広めよという釈迦の御心にかなうことでもあります」と、聖明王は日本に仏教を伝えた理由をそう語る。

「ところが困ったことになったのです」と道昭が、仏教公伝時の問題について語り始める。

第2章 カミの崇拜

道昭の回想の中に欽明天皇の時代の様子が現れ、事態の背景について説明される。

もともと日本では神が信仰の対象になっており、国を治める天皇は司祭者としての性格を強くもっていた。

豪族達もそれぞれの領地にそれぞれの神を祭っていたが、天皇の祭る神は国土全体に豊かな実りと安寧をもたらす神で、その司祭者としての絶対的な権威によって、天皇は豪族達をまとめることができた。

「我ら大王家にとって、神を祭ることが一番の仕事なのじゃ。その力の偉大さは巨大な古墳にあらわれておるであろう」と語る欽明天皇。

天皇自らが異国からやってきた神を祭ることになれば、豪族達の混乱は避けられないと考えた欽明天皇がとった態度は、仏教を受容するか否かを自分では判断せず、豪族達に問うてみるというものだった。

第3章 崇仏論争

欽明天皇から仏教の受容について尋ねられた豪族達の意見は、真っ二つに分かれた。

「他の国に遅れをとってはなりません。わが国でも仏を尊ぶべきです」と、賛成派の蘇我稲目は語り、「もし他国神を礼拝すれば国神の怒りを招きますぞ」と、反対派の物部尾輿は述べ、意見は対立する。

そこで欽明天皇は蘇我稲目に仏像を授け、私的に礼拝することを許す。しかし、おさまらない物部氏は、稲目が建てた堂を焼いたり、仏像を捨てたりと妨害工作に出る。

それでも諦めず礼拝を続ける蘇我氏。ついに尾輿の子・物部守屋と、稲目の子・蘇我馬子の時代になって両者は兵を集めて激突。この戦いで蘇我氏が勝利し、半世紀にわたる仏教受容をめぐる争いようやく終止符が打たれた。この後、日本では仏教興隆の道が大きく開かれ、仏教は氏族が祭る古来の神々と同格の地位を得ることになっていく。

第4章 仏教興隆策

道昭の回想の中に、飛鳥寺の建立当時の様子が現れ、その後の歴史を語り始める。

政治の主導権を握った蘇我馬子は、聖徳太子とともに仏教興隆策を進めていく。

588年に飛鳥寺の建立を始め、それが完成に近づいた594年には推古天皇が「三宝興隆の詔」を出し、渡来系の氏族を中心に寺院建築が盛んに行われるようになった。

「稲目の代からの念願が叶い、嬉しいかぎりじゃ」と喜ぶ馬子。

飛鳥寺には高句麗僧の慧慈や曇徴、百濟僧の慧聡、観勒らが来日し、仏の教えを伝えた。

「推古天皇の時代に仏教興隆策がとられた背景には、それぞれの神を信仰している豪族達を、仏のもとに一つにしたいという狙いもあったでしょう」と語る道昭。

聖徳太子が作成した憲法十七条にも、仏教の精神が息づいていたとも語る。

第5章 天皇集権と仏教

仏教とは一線を画していた天皇家だったが、舒明天皇の時代になって、天皇家の寺として百済大寺の建立を決意する。舒明天皇は唐から帰国した留学僧達を通して、皇帝や国王が先頭に立って仏教を興隆している東アジアの実態を知り、日本においても天皇が仏教興隆の主導権を握るべきだと判断したのだ。

仏教公伝からおおよそ1世紀を経た日本では、天皇家自らが寺院を建立し、仏教を受容する姿勢をはっきりと示した。

「天皇家が主導して仏教興隆を行うのと呼応するように、衰退していったものがあります。わかりますか？」と問いかける道昭。

「答えは巨大古墳」

壮麗な伽藍を持つ寺院が、新しい権力の象徴になったとも思われる。

「余談ですが、653年に唐に渡り、661年に帰国した際に私が持ち帰った火葬の習慣も、古墳が衰退するのと同じ頃に日本に根づいていきました。日本で最初に火葬にされたのは、何を隠そうこの私なのです」

第6章 国家仏教への動き

道昭の回想が、飛鳥浄御原宮の時代となる。

壬申の乱を制し皇位についた天武天皇の時代になって、仏教は新たな発展を見せる。

天武天皇は、伊勢神宮を皇室の祖先神として日本古来の「八百万の神」の最上位に位置づけ、自分はその最高神の子であるとした。さらに金光明經の説くところによって、神の子である自分は仏に守護されて国を治める存在であると位置づけた。

同時に天武天皇は、舒明天皇の百済大寺を受け継いで大官大寺を建立、このことによって「天皇家の氏寺」は「国家の寺」となり、全国の氏族の氏寺は、国家の寺である大官大寺のもとに体系化された。氏族仏教から国家仏教への転換が図られたのである。

持統天皇の時代には全国に500以上の寺が建立され、仏教が広まっていった。仏教公伝からおおよそ150年の歳月を経て、日本全土が仏教の教えによってつながったのだ。

エピローグ

「唐から帰った私は、飛鳥寺に住んでいました。でもほとんど寺にはおらず、各地を行脚して井戸を掘ったり橋を架けたりしておりました。経論の教えは深すぎて理解しつくすことは困難です。

しかし、仏教の教えを広めることが、私の使命だと思っております。それで貧しい人や困っている人のために役立つことを行い、これが仏の御心だと伝えようとしたのです。」

道昭の思いと行いが行基へと受け継がれた奈良時代、天武天皇の曾孫である聖武天皇によって、仏教は国を支える教えとなっていったことが紹介され、物語の幕が閉じられる。